

弔 辞

太田藤一郎君

君は黄泉の国へ旅立ってしまった。私は実に寂しい。体がぞくぞくして膚に粟立ちを覚えるほど寂しい。

君が心臓を悪くして以来もう四年間にもなろうか。この間、君はひたすら心臓の手当に十全を期し、摂生に摂生を重ねて、食べものはもちろん、飲みものをも節していたとき。この四年ほどの間は、かつてないほど私は君と相会うことが稀であった。私自身の多忙もその理由であったが、君の静養を妨げることを恐れたからでもある。ではあるが、私の方は旅に出れば旅先から、例の季節季節の花のエハガキで便りすることを怠らなかった。君の方では、その返事というわけではなかったが、こまめに美しい毛筆の文字を和紙の巻紙に托して季節の移り行くさまを描いて便りとしてくれた。それなのに今日からは、君が果てし無い遠い遠い国へ行ってしまったのであるから、あの通信の糸は断たれてしまった。今後はわが机上にうず高く積み重ねた君の手紙を、時々読み返して、君を偲ぶよすがとしたい。

省みれば、始めて君と相知ったのは昭和11年の4月、君の好きな花々が咲いているころのことであった。私がアメリカ留学を終えて、帰学早々同志社文学会改革に乗り出した時のことであった。第二課程の学生中から君はその委員として選ばれていたので、委員会ではしばしば建設的な意見を戦した。その時、誕生して今日に継続しているものに文学誌『主流』と英文学科通信 *L. L. L.* が健在である。あれから45年の歳月が経った。

君は68才を一期として昭和56年3月14日、みまかった。しかし君が後の世に残した数々の業績は永く永く私たちの脳裡にとどまり後につづく人々に語り伝えることであろう。君の学問的業績については語るべき適当な人

々が数多くいる。だが、戦前、燈火管制されている街々を、文学会会計の赤字解消のため、映画会を開催すべしと君が熱心に主張して、夜中、2人で暗い街を歩きとうとう私を説き伏せて、その実行に及び、所定以上の利益を得て、文学会の危機を乗り越えたことは忘れられない。あの時の最後の私の返事は「今夕は12月14日、赤穂義士討入の日、とうとう上野たる（上野の介）は討ち負かされたナア」と2人で哄笑したことであった。それから君の入営、中支に転戦中しばしば君は便りをくれた。何れも楷書で書かれていて、戦場にあつて、こうも落ち着いて文字が書けるものかと、感嘆したことが度重つたこと、志願兵にならなかつたこと、ロシア語の学習、武道専門学校の学生に同志社大学の学生なるが故に横面をなぐられたと話してくれたこと、3年半の兵役を終えて、金筋に星一つの伍長で帰郷したこと、同志社に復学して学生の勤労働員の指揮をしたこと、思い出を語ればきりが無い。しかし次のことだけは、お別れに当つて、特に強調して、君の人柄を人々に告げておきたい。それは、君が応召をうけた時のことである。真夏のことだつた。すでに出発の時は迫つていた。だが、君はシャツ1枚、ズボンもはかず、私と座敷に対座して、悠々と話してこんでいる。君は立ち上つた。洋服をきるものとのみ思つたのにかかわらず、君はバケツに水を汲み、ひしゃくで水を庭木に、庭石に打つて、「こうすると涼しくなる、帰つたら庭の右手奥に書斎をつくるのだ」と語つた。戦場に出れば生死の程の分らぬで身ありながらこの遠大な計画をゆうよう迫らぬ態度で語るのだから、却つてそれを聞く私が焦りを感じた程であつた。まことに大器というべきであろう。また、君は花をこよなく愛し、挿木して花をさかす名人でもあつた。もう2年程前、君からもらった「大山れんげ」の大輪の白にやや黄味おびた花は君の人品の気高さと、見れば見る程その気品の高さと味の深さを感じさせるさまは、恰かも君の人柄を思わせるものであつた。

あとに残された令夫人、ご子息、ご息女よ、太田君の如く花を愛し、い

つまでも健かできて下さい。そうであることがあなた方の亡き父に対する孝養でありましょう。

昭和56年 3月16日

去る13日の午前2時半、
君の手を握りしめながら
わが掌に伝わる君の
体温を思い浮べつつ

同志社総長 上野 直 蔵